

うたとかたりの対人援助学

第10回 かたりの文化としての手話 その4

鵜野 祐介

「ひまわり教室」訪問

今年(2019年)3月8日、大阪府吹田市の北大阪急行「江坂駅」にほど近い「人の輪と心を育むひまわり教室～聴覚障がい児者支援室～」(以下「ひまわり教室」)を訪問した。

迎えて下さったのは、この教室を主宰する坂本久美さんと西村則子さん。坂本さんは中途失聴者で、西村さんは聴者だが、2人は吹田市立吹田第二小学校(以下「吹二小」)の元同僚教師で、長年にわたって聴覚障がい児と健聴児がお互いを理解し認め合って共に育っていくための教育実践に取り組んで来られ、退職後「ひまわり教室」を開設して今年で10年目になる。

2人とも教室の名前「ひまわり」にふさわしい笑顔のすてきな方で、また、こちらの心にスッと寄り添うしなやかさも持ち合わせておられる。初対面にも関わらず、インタビューの時間はあっという間に過ぎていった。

中途失聴者の小学校教師

坂本さんは小学校教師だった30歳の時に突発性難聴から聴力を失った。補聴器をつけても「ガーガー」という音だけで、太鼓のような低い音以外は、自分の声すら聞こえなくなった。教師を続けることができるか不安だったが、習字と図書の専科教師として勤務できることになり、1985年頃、吹二小に赴任する。

吹二小は1980年に吹田市ではじめて難聴学

級を開設し、聴覚障がい児への教育支援に力を入れていた。西村さんは当初からこれに関わり、はじめは読話(読唇)と発話からなる「口話法」とキューサインを使い指導をしていたが、卒業生のことばをきっかけに手話の重要性に気づく。手話を学習し、手話中心の教育へと転換していこうとしていた、そんな矢先に坂本さんが同校に配属されて来た。

「手話だけで呼んで！」

坂本さんは、「聞こえない世界のすばらしさを伝えられる教師になろう」と、毎時間の授業の中で手話を使った。授業のはじめに手話で全員の名前を「呼んだ」。最初は声と手話と両方使っていたが、子どもたちに「手話だけにして、出席番号順ではなくバラバラで名前を呼んで」とリクエストされた。誰のことかを推理するゲーム感覚で、手話を楽しんでいたのだろう。

坂本さんは、子どもたちへの発問を授業の一番のポイントにするとともに、授業の感想を全員に手話で発表してもらった(「楽しかった」「よかった」「普通」「むずかしかった」等)。その結果、多くの子どもたちが「手話は楽しい」と感じられるようになった。また耳が見える髪型にして補聴器を見せることで、聴覚障がいの子もたちに自信を持つよう身を以って示した。

坂本さんのそうした姿勢は子どもたちだけでなく同僚の先生たちの意識も変えていった。

当初は職員会議でも西村さんが常に手話通訳を行っていたが、次第に他の先生たちも、ジェスチャーや筆記などを総動員して、直接会話しようと努めてくれるようになっていった。そして当時流行していた「サルの反省」ポーズを職員朝礼である先生がして、初めて一緒に全員で笑った瞬間に、「皆とつながった」と坂本さんは実感できたという。

「ひまわり教室」の活動

教室の活動は以下の三本柱からなる。

- ①聴覚障がい児の保護者支援
- ②聴覚障がい児者の当事者支援
- ③ろう者社会と聴者社会の架橋

また 2019 年度の具体的な活動は次の通り。

- ・「ママパパひまわり」(年3回)…聴覚障がい者の体験談を聞く。
- ・「おやじの会」…おとうさんと鍋を囲む。
- ・「難聴学級の卒業生のひまわり会」(年3回)…高校生以上が参加する同窓会
- ・聴覚障がい教職員学習交流会…会話の壁を破る模擬授業や実践レポート・課題解決の交流
- ・「先輩の話とレク交流会」…小4以上・中・高校生企画
- ・特別企画パパママ《リトミック・手話うた・てのひらえほん》
- ・「聞こえないってどんなこと？伝え合う楽しいコミュニケーションを」出前講座・研修会
- ・聴覚障がい児や保護者の相談支援(随時)
- ・「ふうちゃんのとてのひらえほん」(毎月第3水曜日)…手話と声で楽しむ絵本のよみ聞かせ

藤岡扶美さんのプロフィール

坂本さんと西村さんへのインタビュー中、途中から藤岡扶美さんも加わって下さった。藤岡

さんは難聴者、3人のお子さんも難聴で、当初はお隣の豊中市に住んでいたが、吹二小の聴覚障がい児支援教育が素晴らしいという話を聞き、吹田市に引越して同小に子どもたちを通わせるようになり、坂本さんや西村さんと出会う。2人との出会いが、難聴者としての自分を受け容れ、前向きに生きていくよう背中を押してくれたという。

藤岡さんは、母親たちの絵本読み聞かせボランティアの活動に参加し、子どもたちの卒業後は、手話をつけた読み聞かせを始めるようになる。「ひまわり教室」を最初は練習場所として利用していたが、やがて聴者とろう者・難聴者が一緒に絵本を楽しむ場となり、現在では「ふうちゃんのとてのひらえほん」としてこの教室で月1回、声と手話でよむ絵本の時間を開いている。また、大阪府立中央聴覚支援学校や生野聴覚支援学校でもPTA手話教室講師や絵本読み聞かせを行っている他、「手話うたパフォーマンスコンサート」を全国各地で開催している。

「ふうちゃんのとてのひらえほん」

5月15日(水)午前10時30分から12時まで開かれた「てのひらえほん」の会に途中から参加させていただいた。当日の参加者は、坂本さん、西村さんを含めて10数名、そのうち男性は2人、聴覚障がい者は坂本さんと藤岡さんも含めて4名、また全員、絵本や手話に関心を持つ、この会の常連の中高年の方が多かった。

筆者が到着したのは11時10分頃だったが、藤岡さんが『かぜのでんわ』(いもとようこ、金の星社)を読んでおられるところだった。岩手県大槌町に実在し、東日本大震災後にわかに注目された、「向こうの世界」にいる人とつながるための「風の電話」を題材にした動物絵本で、藤岡さんは声と手話の両方を使って、しっかりと、感情過多にならず淡々と読んでいかれた。

目頭を押さえて聞き入る人も見受けられた（「音」や「声」を通してのつながりをテーマとするこの作品を、ろう者の方がたはどんなふう
に受けとめておられるのだろうか。いつかお聞きしてみたい。）

次に読んだのは、『しゅわしゅわ村のだじゃれ大会』（くせさなえ、偕成社）という、手話の学習にもなる「ダジャレ遊び」の参加型絵本で、参加者の皆さんは藤岡さんの手話を真似しながら大きな声で体を揺すって笑っておられた。

「サトシン訳 はなさかじいさん」

それから、筆者が日本の昔話を研究していることにちなんで、藤岡さんが個人的なおつきあいもあるという絵本作家のサトシンさんが作詞・プロデュースして歌っている「花咲か爺」を、手話をつけて歌って下さった。「うらのはたけでポチがなく〜」で始まる唱歌版ではなく、河野玄太作曲の J-POP 風のリズムカルなメロディに乗せた、次のような歌詞のもの。

「かれた ところに みはならず／こんやもさかせましょう！／はなさかじいさん～！
／しょうじきいさん ポチつれてき／はたけにいて みたところがさ／ここほれわんわん
ここほれわんわん／ほってみたらば こはんが ざっくざく／しょうじきいさん
よろこんだ よろこんだ」

この歌はCDアルバム『サトシン訳 1曲でわかる日本むかしばなし』（King Record Co. Ltd., 2017）に収録されている。このCDには、他にも「鶴の恩返し」「桃太郎」など全部で 10 話の日本昔話が「ネオジャパネスク」「レゲエポップ」「ヘビーメタル」などの曲調にアレンジされて収められている。藤岡さんは自身の活動でこの「サトシン訳」昔話のうたを積極的に取り上げている。今の子どもたちにもっと昔話に慣れ親しんでほしいからだという。

筆者も早速このCDを取り寄せて視聴してみた。お手玉やまりつきに似合う「ぴょんこ節」のリズムの文部省唱歌版に慣れ親しんだ世代にとっては、こんな歌では日本の原風景が台無しだと嘆かわしく思われるかもしれない。けれども唱歌版を知らない世代にとっては、昔話の持つ破天荒でエキセントリックな特性を引き立ててくれる音楽として小気味よく聞こえるのではないだろうか。

最後に藤岡さんは、参加者のリクエストが一番多かった『ろくべえまってるよ』（灰谷健次郎／長新太、文研出版）を手話つきで読んだ。ハラハラドキドキしながらもハッピーエンドとなる物語に、参加者の皆さんは満足そうに微笑んでおられた。以上でこの日はお開きとなった。

ろう者は全身の皮膜で聞いている

藤岡さんのブログを見せていただくと、その肩書は「手話うたパフォーマー」とある。彼女は全国各地で「手話うたパフォーマンスコンサート」を開催しているが、このコンサートには、聴者もろう者（難聴者を含む）も観客として参加しているという。

聴者とろう者、それぞれこのコンサートをどのように楽しんでいるのだろうか。そもそも、ろう者にとって、うたは聞こえないはずなのに、コンサートを楽しむことができるのだろうか。

「てのひらえほん」の会の後、坂本さん、西村さん、藤岡さんに残っていただき、失礼な物言いとなりかねないことを危惧しながら、あえてこの点について質問してみた。

すると、皆さんの答えは、ろう者はうたや音楽を「耳」で聞くことは難しいが、「身体」で聞くことはできるということだった。筆者なりに解釈してみよう。「鼓膜」で空気の振動をキャッチするのは難しいけれど、「身体の皮膜」でキャッチすることはできる。特に足の裏では、ズン、

ズン、という重低音を聞き取ることができるという。確かに筆者自身、あるコンサート会場で巨大なスピーカーの前の席に坐った時、最初に発せられた大音響が全身を貫いていく感覚を覚えた経験がある。さらに言えば、難聴となったベートーベンがピアノの共鳴板に耳を押し当ててその振動を聞き取ろうとしたという有名な逸話も、空気の振動をキャッチする身体の「皮膜」が決して「鼓膜」だけではないということを示す証左なのではなかろうか。

ろう者のための4つの工夫

坂本さんが、藤岡さんの「手話うたコンサート」において、ろう者が楽しめるように凝らされている「4つの工夫」を挙げて下さった。そのうちの1つが今述べた「身体の皮膜」で音をキャッチできる「抱っこスピーカー」を希望者に貸し出すことである。筆者も体験させてもらったが、腕と上半身の「皮膜」で空気の振動をキャッチして、「身体で聞く」ことができた。

それから2つ目は手話でうたうこと、3つ目はスクリーンに歌詞の字幕を映し出すこと、そして4つ目はスクリーンに映像を映し出すことだという。これらのうち、2つ目と3つ目は言語情報を提供するという効果があることは一目瞭然だが、最後の「スクリーンに映像を映し出す」ことにはどんな意味や効果があるのだろうか。

音の共感覚

文化人類学者・川田順造さんの『聲』（ちくま学芸文庫 1997）に「音の共感覚」という概念が出てくる。「共感覚 [synesthesia]」とは「声も含めたさまざまな表出・感受領域のあいだの照応」（65 頁）と定義されているが、具体的には、視覚や触覚や嗅覚や味覚としての感覚を、聴覚としての感覚に変換して受けとめるというもので、例えば太陽の光が「ぎんぎんぎらぎら」、

かき氷を食べた時の冷たさが「キーン」、香水の匂いが「プーン」、唐辛子を口にした時の「ピリピリ」、こういった「音」として表現されることを指す。つまり5つの感覚神経がそれぞれバラバラに働いて情報をキャッチするのではなく、連動し協力し合ってキャッチした結果、たくさんの擬声語や擬態語が作り出されているのである。

ここから仮定されることとして、「手話うたコンサート」の中でスクリーンに映し出される映像は単なる視覚情報にとどまらず、「共感覚」として聴覚にも、また時には触覚や嗅覚や味覚にも働きかけているのではないか。そして同じ映像から、観客それぞれが自身のそれまでの経験に基づいた、異なる「音」や「肌合い（温度感覚）」、「匂い」や「味」を心の中に立ち昇らせているのではないだろうか。こうして観客は「共感覚」を発揮させて、映像が発する「音」を受けとめている、そんな解釈も成り立つだろう。

ろう者と聴者が共に楽しめる場に

「4つの工夫」は聴者に対しても効果を発揮する。「音」は耳（鼓膜）だけでなく全身の皮膜を通してキャッチするものであることを体感させてくれると同時に、自分の中に眠っていた「共感覚」を目覚めさせてくれる。また、手話という身体的言語を、視覚を通して受けとめることで、一つひとつの言葉が持っているイメージをより豊かに感じとることができる。

そして何よりも大きな楽しみは、うたが描く物語世界をろう者と共有することができることだろう。ろう者と聴者が、手話うたを通してつながるということ、それは藤岡さんがコンサートを開く一番の目的に他ならない。

今年（2019年）8月30日（金）、藤岡さんのコンサートが豊中市立アクア文化ホールで行われる。ぜひ体感していただきたい（問合せ：manatsu.taiyo@gmail.com）。